アイヌの霊送り儀礼の地域的様相
―江戸期の様相とともに（1）

Local manner of the spirit-sending ceremony for bear by the Ainu（1）

秋野　茂樹

Shigeki AKINO

はじめに

アイヌの飼いグマの霊送り儀礼（以下「霊送り儀礼」という）は，明治以降，実施の主旨を多方面に持ちながらも，現代に受け継がれており，これまでに実施された儀礼は数多に及ぶ（小川 1997，東村 2002）。周知の通り，同儀礼は，捕獲した仔グマを飼養した後殺す―親グマ（親神）から託された仔グマを飼養した後，親元＝神々の世界に送り帰す際に執り行う儀礼である。しかし，儀礼の様相は，江戸後末期，一つの形式ができ上がり，それが現代に伝承されていると考えられる。すなわち，従来は，クマの捕獲＝食糧獲得の祝賀と，それの恒常性を希求する場としての儀礼であったものが，場所請負制下におけるアイヌ社会の変容とともに，その実施の意義＝主旨も多様化し，従来の意義＝主旨を基盤におきつつも，乙名・脇乙名・土産取などといった財力を有する者の己の財力を誇示・開陳する場ともなったのである（秋野 2006a，同 2006b，同 2008）。それは，アイヌが宝物としている漆製品や金属製品といった移入品を，「神への土産」と称して，儀礼会場に余すところなく陳列して参会者に見せつけ，主催者がその財力を誇示する行為である。

明治以降に実施され，記録された儀礼を見ると，この江戸後末期の様相が受け継がれていることがわかる。しかしながら，それは北海道内において画一的なものではなく，地域的様相をも持っている。

本小論では，江戸後末期における霊送り儀礼実施の記録と，これまでに報告された民俗調査等を対照させ，儀礼が伝承される過程における変容と，明治以降における霊送り儀礼の地域的様相の考察を試みるものである。

1．考察に用いる史資料

本小論の考察にあたっては下記史資料を用いたが，必要に応じて他の史資料も用いた。

江戸後末期における霊送り儀礼の様相については，次の3史料を用いた。（以下，用いる際には，それぞれ「蝦夷」「東蝦夷」「北役」と略記する。）

- 秦檍丸：1798「蝦夷見聞記」（佐々木利和・谷澤尚一研究解説：『蝦夷島奇観』雄峰社　1982 所収）
- 大内余庵：1861「東蝦夷夜話」（大友喜作編：1972『北門叢書』5　国書刊行会　所収）
- 白井久兵衛：1863「北役紀行」（手塚薫他：「接触・交錯するアイヌと和人のまつり―『北役紀行』記載，文久3（1863）年ハママシケの神社祭礼とクマ送りから―」『北海道開拓記念館研究紀要』33　北海道開拓記念館）

これらの史料にある儀礼は，いずれも筆者の実見・見聞記であり，秦はクナシリ島のトマリ（秋野

2006a)，大内は北海道東部のアツケシで実見しており，白井は日本海側のハママシケで実見者から詳細に様子を聞き書きしている。

次に，明治以降における資料は下記のとおりである。

・十勝（伏古）

犬飼哲夫・名取武光：1939「イオマンテ（アイヌの熊祭）の文化的意義とその形式（一）」『北方文化研究報告』2　北海道帝國大學

・釧路

a．犬飼哲夫・名取武光：1939「イオマンテ（アイヌの熊祭）の文化的意義とその形式（一）」『北方文化研究報告』2　北海道帝國大學

b．更科源蔵：1955『熊祭』北方文化写真シリーズⅠ　楡書房

c．佐藤直太郎：1958『釧路アイヌのイオマンデ』市立釧路図書館叢書第四編　市立釧路図書館

・平取・二風谷

a．伊福部宗夫：1969『沙流アイヌの熊祭』みやま書房

b．萱野　茂・須藤　功：1979「キムンカムイ・イヨマンテ」『写真集 イヨマンテ』国書刊行会

・旭川（上川）

a．北海道教育庁社会教育部文化課編：1982「2．ヒグマをめぐる人間活動」『昭和56年度アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査Ⅰ　旭川地方）』北海道教育委員会

b．相賀徹夫編：1985『イヨマンテ—上川地方の熊送りの記録』小学館

・白老

財団法人アイヌ民族博物館編：1995『イヨマンテ—熊の霊送り—報告書Ⅱ－平成2年2月におこなったイヨマンテの実施報告－』財団法人アイヌ民族博物館

十勝及び釧路aは，十勝伏古村（現帯広市）の古老古川辰五郎からの聞き取りによる同地域の儀礼と，1939（昭和14）年12月16・17日に実施された釧路標茶村虹別スワンコタン（現標茶町）で実施された儀礼である。同bは，釧路川周辺の記録とある。掲載写真は，1951（昭和26）年1月，北見国常呂（現北見市），同1954（昭和29）年4月，釧路国屈斜路湖畔でそれぞれ実施された儀礼のものであるが，文字情報の年代・日時等は不明である。同cは，1936（昭和11）年1月5日，白糠・石炭崎，同1939（昭和14）年12月16日，標津村虹別でそれぞれ実施された儀礼の実見記録に加えて，釧路春採の古老らからの聞き取りを参考としている。

平取・二風谷aは，二谷国松をはじめとする古老からの聞き取りと，実見をもとにしたとあるが，その儀礼実施の年代・日時等は記されていない。同bは，1977（昭和52）年3月3日から5日にかけて実施された儀礼の記録である。旭川（上川）aは，北海道教育委員会が1981（昭和56年）に実施した民俗調査の記録で，石山長次郎・キツエ，清水キクエ，杉村京子，伊沢ヒサ，大村ユキらからの聞き取りである。同bは，1985（昭和60）年1月15日から17日にかけて，川村カ子トアイヌ記念館において実施された儀礼の記録である。

白老は，財団法人アイヌ民族博物館が，1990（平成2）年1月24日から26日にかけて実施した儀礼の記録である[1)]。

これらの記録は，実施年代および聞き取りの年代にやや時間的な隔たりがあるが，「明治以降」というひとつの枠のなかで捉えることとした。

2．実施の時期・日数

2－1．時　期

霊送り儀礼の実施時期は，広く冬期間といわれている。実際，江戸期の記録を見ても，11月から12月（旧暦）が多い。送りの対象である仔グマの生育状況，場所での労働など生業との関係などから，この時期が最も適当なのであろう。あるいは，山猟を前にしての予祝，結束力の確認といった意味合いがあるとの伝えもある。

具体的には，「蝦夷」には十月，「東蝦夷」には冬月，「北役」には十二月十二日とある。筆者がかつて考察したように，「蝦夷」にある記録は，秦がクナシリ島のトマリに滞在した7月29日から8月25日の間に，当地のアイヌたちに実施させた儀礼の記録であり，十月とあるのは聞き書きによるものであろう（秋野 2006a)。「東蝦夷」「北役」はいずれも冬であるが，実施した場所が請負場所で和人が混住しているところであることに注意しておきたい。

明治以降では，十勝が12月，釧路が12月，1月，4月，平取・二風谷が1～3月，旭川が12月末から1月初旬，1月，白老が1月とある。アイヌ社会が大きく変容した明治以降，それまで財力を持つアイヌによった霊送り儀礼の実施も，アイヌの一般的なものとなったが，その実施の時期は江戸期を踏襲しているのである[2)]。

2－2．日　数

次に，儀礼の日数であるが，江戸期の「蝦夷」「東蝦夷」では，1日で儀礼が終了していると読み取れる。「北役」には，「翌日ハ〔挿入〕「豆飯を焚」熊の肉を煮て酒宴を催し、頭を杭に指し、小屋の前ニ立、カムイと崇、皮ハ運上屋ニ納るよし、……」とあることから，2日間に亘っていることがわかる。

明治以降では，十勝が3日，釧路aが2日（前祭・本祭)，釧路cが3日（前祭・本祭・後祭)，平取・二風谷aが4日（前日祭・本祭第1日・本祭第2日・本祭第3日)，旭川aが3日，旭川bが3日（前夜祭・本祭り・後日祭)，白老が4日（前夜祭・本祭1日・本祭2日・本祭3日）となっている。

この儀礼の日数を見ることにより，儀礼実施の意義の推移が見てとれる。すなわち，先述したように，江戸時代場所請負制下における儀礼の実施は，財力を持つアイヌによる，その財力の開陳の場とするに主眼を置き，「霊を送る」という本来性が側面化されたことにより，儀礼日数の大半が1日という状況を生じせしめたと考えられる。財力の開陳は1日あれば充分なのである。加えて，儀礼には大量の酒を消費することから，経済的な要因も備わっているのである。

明治以降になると，日数が増え，平均して3日間となる。前祭があり，本祭も2日をかけるようになる。その要因として，場所請負制の崩壊により，場所におけるアイヌの序列が消滅し，儀礼の担い手が特定の者から広く一般的となり，実施の主眼が「財力の開陳」から本来の「霊を送る」ことに置かれたことによる。すなわち，精神性に重きが置かれ，「鄭重性」が備わったと考えられる。

この儀礼実施の時期・日数をまとめると，表1となる。

3．ヌササンに祀る神々

霊送り儀礼では，ヌササンには関係する神々が祀られ，屋外での儀礼の執行を見守り，クマ神がカムイ・モシリへ旅立つ直前，アイヌ・モシリでの最後の滞在の場となるが，祀られる神々・数は地域

表１　実施の時期・日数

史料・地域名	時　期	日数	備　考
蝦　夷	十月	1	
東蝦夷	冬月	1	
北　役	十二月十二日	2	
十　勝	12月	3	
釧路a	12月	2	前祭・本祭・後祭（本祭・後祭は2日目に実施）
釧路c	12月、1月	3	前日・当日・後祭り
平取町二風谷	1～3月	4	前日祭・本祭第1日・本祭第2日・本祭第3日
旭川a	12月末～1月初旬	3	
旭川b	1月	3	前夜祭・本祭り・後日祭
白　老	1月	4	前夜祭・本祭1日目・本祭2日目・本祭3日目

的様相が顕著である。江戸期のヌササンを見ると，その個々の神名は記されていないが，アイヌ絵には数多のイナウが描かれている。例をあげると，秦檍丸の『蝦夷島奇観』(1799) には38本のイナウが，平澤屏山の「熊送り図」(国立スコットランド博物館蔵，江戸末～明治初) には15本のイナウが見える。いずれも現代に伝わるキケパラセイナウの類であり，また，イナウの配列も整然としたものではなく，ヌササンを飾るかのごとく雑然としている。

明治以降では，民俗調査などにより，北海道内各地域において祀られている神々の神名・数が明らかになっている。それらの神々は，地域性はもとより，同一地域内においても個々人により異同がある。すなわち，地域内の信仰観を同一にして，そこに個人の生業などに基づいた信仰観による神々が加味されている。以下，各地域を個々に見ることとする。

3－1.十　勝

本資料のインフォーマントである古川辰五郎が祀っている神々は，次の9神である。

1.ポロヌプリ（元来は雷神）　2.コタンコロカムイ（集落を守護する神）
3.ニアシコロカムイ（山全体の神）　4.チツプタケチカツプカムイ（クマゲラを表す神）
5.ホロケウカムイ（狼の神）　6.ワッカウシカムイ（水の神）
7.ケマコシネカムイ（狐の神）　8.シランパカムイ（蛇の神）
9.チアツチアツクカムイ（狩猟の神）

次に，同じく帯広伏古の坂下徳二郎は，12神を祀っている（吉田巌 1953)。

1.ヌプカウシウンカムイ（ヌプカウシヌプリの神）　2.ホロケウカムイ（狼の神）
3.チプタチカプカムイ（クマゲラの神）　4.ニヤシコロカムイ（原野の神）
5.コタンコルカムイ（集落を守護する神）　6.ポロシリウンカムイ（ポロシリの神）
7.ムルクタウンカムイ（穀物の神）　8.ウナヌエウシウンカムイ（不明）
9.ソヤカムイ（蜂の神）　10.チャキチャキカムイ（不明）
11.シランパカムイ（蛇の神）　12.ケマコシネカムイ（狐の神）

さらに，山川弘は，10神を祀っている（内田 1989)。

1.ポロシリウンカムイ（ポロシリ岳の神）　2.ニヤシコロカムイ（不明：鳥の一種か）
3.コタンコロカムイ（エゾシマフクロウ）　4.チプタチカプ（クマゲラ）
5.シペッカムイ（十勝川の神）　6.コムニシリコロカムイ（カシワの木）
7.シランパカムイ（ヘビ）　8.チャクチャクカムイ（不明：鳥の一種らしい）
9.サチリカムイ（不明：20cm位の白い動物）　10.チロンヌプ（キツネ）

これらを見ると，現帯広市を生活体験地としている三者が祀る神々には，山に係る神々が多くを占

めているのに反して，海に係る神々が皆無である。また，三者に共通した神々が見られる。集落を守護する神，ポロシリの神，クマゲラの神，ヘビの神，キツネの神の５神である。集落を守護する神，クマゲラの神を除く３神はいずれも狩猟＝食糧獲得に係る神々であり，山野を主たる生業地としていたことが見て取れる。因みに，これらの５神は地域内同一的に信仰の対象としたものであり，他の神々は，個人的な信仰の対象であるといえる。

3－2．釧　路

釧路ａにある屈斜路村・磯里鶴松のヌササンには，８神が祀られている。

1．モシリコロカムイ（梟）　2．カンドコロカムイ（龍神）
3．チユツプカムイ（日輪の神）　4．カムイシユトカムイ（マシユウ湖の中島の神）
5．ピンネシリ（雄阿寒岳の神）　6．サラペナケ（斜里川の奥の神）
7．シペツペナケ（シペツ川の奥の神）8．チワシコロカムイ（屈斜路川の神）

次に，釧路春採・志富亥之助のヌササンには，８神が祀られている（佐藤 1958）。

1．カンナカムイ（竜神，雷神）　2．カムイシュマ（知人の神石）
3．モシリコロカムイ（縞梟の神）　4．レプンカムイ（沖の神）
5．チュプカムイ（日神）　6．マツネシリ（雌阿寒岳）
7．ピンネシリ（雄阿寒岳）　8．ワツカウシカムイ（水神）

同じく，釧路春採・結城庄太郎のヌササンには，７神が祀られている（名取 1941）。

1．リパウエンカラカムイ（天日神）　2．ピンネシリカムイ（雄阿寒岳神）
3．マチネシリカムイ（雌阿寒岳神）　4．コタンコロカムイ（梟の神）
5．カイベコロカムイ（沖の神）　6．ワッカウシカムイ（水の神）
7．タンネチュップカムイ（月の神）

塘路・島太郎のヌササンには，７神が祀られている（名取 1941）。

1．ピンネシリ（雄阿寒岳の神）　2．チワシコロカムイ（川の神）
3．レプンカムイ（沖の神）　4．エペレイナウ（仔熊の幣）＝２本
5．クンネレックカムイ（梟の神）　6．エレカシオマンカムイ（太陽の神）
7．モシリコロカムイ（縞梟の神）

釧路は，他の地域とは顕著に異なる神々を祀っている。すなわち，磯里鶴松のヌササンに見えるカンドコロカムイ（龍神），チユツプカムイ（日輪の神），志富亥之助のヌササンに見えるカンナカムイ（竜神，雷神），チュプカムイ（日神），結城庄太郎のヌササンに見えるリパウエンカラカムイ（天日神），タンネチュップカムイ（月の神），島太郎のヌササンに見えるエレカシオマンカムイ（太陽の神）など，自然神のなかでも特に天体・気象に関わる神々が多い。他地域では見られない，釧路の大きな地域性である。夏季，日射量の少ない太平洋岸特有の気候との関わりが考えられる。また，４例すべてに雄阿寒岳の神が祀られていることも大きな特徴である。雄阿寒岳は，生業との関わりよりも，山岳信仰としての象徴的な存在と考えられる。さらに，他地域においては普遍的であるキツネの神が存在しない。狩猟神あるいは守護神のひとつであるキツネの神の不在は，やはり生業との関わりによるものと考えられる。

3－3．平取・二風谷

二風谷ａの伊福部の記録には，５神が記されている。

1．ヌサコロカムイ（幣所の神，大幣の神）　2．シランパカムイ（木の神）

3．ハシナウカムイ（狩猟の神）　　4．メトゥトカムイ（熊の神）
5．ワッカウシカムイ

二風谷bの萱野茂のヌササンには，5神が祀られている。1977（昭和52）年に実施した霊送り儀礼のときのものである。

1．ヌサコロカムイ（農業神）　　2．シランパカムイ（森の神）
3．ハシナウカムイ（狩猟の神）　　4．メトシッカムムイ（熊の神）
5．ワッカウシカムイ（水の神）

次に，平取の平村コタンピラは，15神を祀っている（名取1941）。

1．ヌサコロカムイ（幣所の神）　　2．イモシカムイ（荒神）
3．シランパカムイ（樹木の神）　　4．ハシナウウクカムイ（狩の神）
5．ワッカウシカムイ（水の神）　　6．オキクルミカムイエカシ（オキクルミ神）
7．ナヨプツウシペペンタプカシエアンパカムイ（アベツの沢口の神）
8．ペテンカウシペ（門別川縁の山の神）　　9．コタンコロチカプ（アベツ川にいる梟神）
10．シトゥンペカムイ（狐の神）
11．チカポイペンタプカシアンバカムイ（サラバの川向の大鷲の神）
12．トゥンニカムイ（村の柏木の神）
13．ポパイウシナイコロカムイ（オパウシナイの水の神）
14．コタンノシキウンナイコロカムイ（村の真中の水の神）
15．コタンパナイコロカムイ（村の上のほうの水の神）

また，名取の調査で祭祀者が不明のヌササンには，14神が祀られている[3]（名取1941）。

1．ヌサコロカムイ（幣所の神）　　2．イモシカムイ（荒神）
3．シランパカムイ（木の神）　　4．ハシナイナウカムイ（狩猟の神）
5．メトットウシカムイ（熊の大王）　　6．コタンコロカムイ（集落を守護する神）
7．オキクルミカムイ（オキクルミ神11）　　8．ペテンカウシペ（門別川縁の山の神）
9．ナヨプチウシペ（アベツの沢口の神）　　10．シトゥンペカムイ（狐の神）
11．ワッカウシカムイ（水の神）　　12．ツンニカムイ（旧平取村の柏の木）
13．ポパイウシナイコロカムイ（オパウシナイの沢水の神）
14．コタンパウシナイコロカムイ（村の上の方の沢水の神）

平取・二風谷は，時代が新しくなるにつれて神数が減少している。二風谷aとbは，祀っている5神が同一であり，bがaを踏襲したと考えられる。地域内同一性として，シランパカムイ，ハシナウカムイ，ワッカウシカムイの4神が4例すべてに見られ，メトゥトカムイも平村コタンピラを除く3例に見られる。これらの神々を基盤として，個人の信仰対象とした神々が祀られている。特徴的なのは，2例にペテンカウシペ―門別川縁の山の神が祀られているものの，特定の高山を対象とする山岳信仰が見られない。また，個人の信仰対象の範疇と考えられるが，オキクルミカムイ，イモシカムイといった伝説に登場する神，具体的にヨモギで形作られる神なども特徴的である。さらに，特定の川・水に関わる神々が多いことも他には見られない。

3－4．旭　川

旭川aの資料には記載はないが，1982（昭和57）年の北海道教育委員会の調査では，石山長治郎は6神を祀っているとある。

1．ワッカウシカムイ（水の神）　　2．チノミシリ（旭岳）

3．チノミシリ（嵐山）　4．ハシナウㇰカムィ（狩猟の神）
5．シトゥンペカムィ（幸福の神）　6．ポンチカㇷ゚（小さい鳥の神）

次に，旭川bには，川村兼一のヌササンに12神が祀られている。

1．コタンコロカムィ（国土の神）　2．シランバカムィ（大地の神）
3．ホロケゥカムィ（武勇の神）　4．シトゥンペカムィ（運を授ける神）
5．ヌプリコロカムィ（山の神）　6．イソアニカムィ（猟の神）
7．クッコロカムィ（涯路の神）　8．ヌサコロカムィ（幣場の神）
9．チャッチャクカムィ（幸運の神）　10．ウパシチロンノプカムィ（厄除けの神）
11．カッケゥカムィ（水猟の神）　12．ワッカウシカムィ（水の神）

因みに，この12神は次の倉光秀明の記録にある12神を踏襲していると考えられる。

倉光秀明の記録には，12神が記されている。これは，1947（昭和22）年2月22日，旭川常盤公園での門野ナンケアイヌ，石山アツミヤシクル，川村カ子トアイヌ，門野ハウトウムテイ等による霊送り儀礼のときのヌササンに祀られた神々と思われる（小川1997，倉光1953）。

1．コタンコロカムイ（国及部落神）　2．シランバカムイ（その土地の神）
3．ホロケウカムイ（武勇の神）　4．シトウンペカムイ（幸運の神）
5．キムンカムイ（山の神）　6．イソアニカムイ（猟の神）
7．クッコロカムイ（涯路の神）　8．ヌサコロカムイ（神事受持の神）
9．チャッチャクカムイ（幸を教える神）　10．ウパシチロンノップカムイ（危難救いの神）
11．カッケウカムイ（水猟の神）　12．ワッカウシカムイ（水の神）

山間地にある旭川は，当然のことながら海の関わる神々が存在しない。また，川を司る神も不在である。特徴的なのは，石山長治郎のヌササンで，6神のうち2神が山岳を対象としたもので，ひとつは旭岳という大雪山連峰のなかの高山であり，ひとつは嵐山[4]という比較的集落に近く，低い山である。両山をチノミシリと称して祀っているところに，個人性が見られる。また，bや倉光に見られるホロケゥカムイ―オオカミが武勇の神として祀られているのは，2例ではあるが，地域性のものと思われる。

3-5．白　老

財団法人アイヌ民族博物館（以下，「博物館」ともいう）が1990（平成2）年に実施した霊送り儀礼では，13神が祀られている。

1．シリコロカムイ（大地を司る神）　2．ハシナウウッカムイ（狩猟の神）
3．クッタルシヌプリコロカムイ（クッタルシ山の神）
4．メトッウシカムイ（熊の大王神）　5．ペテトクンカムイ（水源の神）
6．ケマコシネカムイ（キツネの神）　7．トーコロカムイ（沼の神）
8．ワッカウシカムイ（水の神）　9．トマリコロカムイ（舟付き場を司る神）
10．チワシコロカムイ（河口を司る神）　11．マサㇲコロカムイ（海岸を司る神）
12．コタンコロカムイ（村を司る神）　13．ヌサコロカムイ（ヌサを司る神，穀物の神）

次に，熊坂シタッピレのヌササンには，12神が祀られている（満岡1941）。

1．トマレコロカムイ（海の神）　2．マシャレコロカムイ（海岸の神）
3．チワシコロカムイ（川尻の神）　4．ワッカウシカムイ（川の神）
5．チロンヌップカムイ（狐の神）　6．シュルクカムイ（毒草の神）
7．イヌイナカムイ（隠れ処の神）　8．ベンテンシャマ（弁天様）

9. ヌプルペツカムイタップカシエヌプルカムイ（登別温泉の神）
10. シランバカムイ（山の中腹の神）　11. ハシナウウッカムイ（熊の神）
12. ヌシャコロカムイ（飯米の神）

また，宮本伊之助（イカシマトク）のヌササンには，山グマを送るときのものであるが，8神他が祀られている（名取 1941）。

1. イソサンゲクル（獲物を降ろす神）　2. シランバカムイ（山の神）
3. ヌプリペトオルン（ヌプリ川の神）　4. チロンヌップオルン（狐神）
5. トマリオルン（泊の神）　6. マサオルン（舟の出入の時の神）
7. ペットオルン（川の神）　8. キムンカムイ（熊の大神）　他

白老は，海・山ともに持っていることから，両者に関わる神々が祀られている。博物館及び熊坂が祀る神々では，海に関わるものとして，トマリコロカムイ（舟付き場を司る神，海の神），チワシコロカムイ（河口を司る神，川尻の神），マサラコロカムイ（海岸を司る神，海岸の神）が共通してあるが，いずれも河口・海岸といった陸地に接したところである。レプンカムイ，アトゥイコロカムイといった海全体，あるいは外海に係る神々は祀られていない[5]。また，熊坂が川の神としてワッカウシカムイを祀っているのみで，川に関わる神々が見られないのも特徴的であり，地域性を示すものと思われる。

熊坂のヌササンに祀られているシュルクカムイ（毒草の神），イヌイナカムイ（隠れ処の神），ベンテンシャマ（弁天様），ヌプルペツカムイタップカシエヌプルカムイ（登別温泉の神）は，個人の信仰対象として特徴ある神々であり，特にベンテンシャマ[6]は和人文化の影響を受けているものであろう。全体が不明ながらも，宮本のヌササンもまた個人性がよく表れている。宮本は観光業の傍らクマ猟をよくしたが，その狩猟に関わりのある神々が多く祀られている。なかでも川に関わる神が2神祀られており，猟場への交通路，あるいは獲物の搬路である川は，信仰としても重要な位置づけがなされている。

以上見てきたように，儀礼実施時に祀られる神々は，大きく三相がある。ひとつは，広く普遍的に祀られる神々であり，ひとつはひとつの地域内において祀られる神々であり，そして個人の信仰により祀られる神々である。それらのほとんどは自然神や動物神であるが，儀礼の主人公であるクマに関わる神々は少数であり，多くは，日々の生活の営みに関わっている神々である。因みに，物神は祀られていない。

4. 花　矢

次に，儀礼実施時に製作・使用される「もの」のうち，花矢の地域性を見ることとする。周知のとおり，花矢は，和人社会に見る鏑矢である。霊送り儀礼における花矢の役割は，①ヘペレシノッの際，クマ神に向けて射られる矢—すなわち，クマ神の遊び道具，②儀礼の盛会をカムイ・モシリに伝える，③除魔—クマ神に，カムイ・モシリへの帰り道を指し示すとともに，その道を払い清める，④クマ神に持たす土産，などがある。こうした役割を担っている花矢は，儀礼時，イナウル（キケ）に次いで数多製作される。

江戸期の記録を見ると，「蝦夷」には，「……男子たる者ハ嬰児にいたる迄、弓矢備に製したる。異なる人毎に一張ツゝを持せ引、歩行中熊に射かけ射かけす。初ハ熊を飼し家の惣領の子夷ともの風俗にて末子を建て家を納めさせける故に家を納め子より射ルもあり射、夫より乱ニ矢をはなつ……」とあり，「東蝦夷」には，

「……假の弓矢をもて四方八面より射出すに、その矢幾筋となく熊の身にたつを、そをまた細長き木の先へ笹を付たるをもて、たちたる矢をはらひ落してまはる……」とある。また，「北役」には，「……備へ置たる弓矢をとり、二王尊に紙を投ル様に我能所に中んと無二無三に熊を射ル其立矢ハさながら蓑を着たることく……」「……夫より死せし熊の縄を解キ、南向にうつ伏ニし、……其時祭り主惣太郎紋附の着ものを着、弓矢を持出、一本ハ天ニ向て射、一本ハ北ニいる……」とある。いずれも，上述した①のヘペレシノッを伝えており，「北役」はまた，②③をも記している。「北役」の「熊の身にたつ」「たちたる矢」という記述，さらには，「……矢ハ鴨の羽を附たる一ツ羽の矢ニて束二尺斗鏃ハ木ニて小蝋燭の格好ニ作り、心ンを尖ケて長クし、色々彫ものして甚奇雅也、了弥一本貫ひ来ル、是ハ二ツ巴の紋を彫タルなり……」とあることから，花矢の具体的な形状を見ることができる。

ここでは，形状については，名取の詳細な報告があるので（名取 1985），同資料をご覧いただくこととして，名称と④のクマ神に持たす土産とした際の数量などについて，名取の報告（以下「名取」という）を援用しつつその地域性を見ることとする。

4－1.十　勝

十勝伏古の古川辰五郎は，名称はチロシ，土産として持たせる数量は，雄グマが 50 本，雌グマが 60 本で，雌グマが多い理由として，「人間の場合と同じ様に女は親元へ帰っても男より多く土産物を要するから」とある。名取には，音更・中村要吉は１歳グマがエペレアイ，２歳グマはペウレップアイとある。土産の数量は，音更では，１歳グマ，２歳グマ，３歳グマすべて雄が 50 本，同雌が 60 本とあるが，ケネ（現芽室町内）では，１歳グマ，２歳グマともに雄が 60 本，同雌が 50 本と，前２例と雌雄で逆転している。

4－2.釧　路

釧路ａには，名称はチロシとあり，土産の数量は，１歳グマの雄が 50 本，雌が 60 本であるが，常に２～３本余計に持たせる習慣であるとある。同ｂには，名称はエペレアイとある。土産の数量は，１歳グマ，２歳グマ，３歳グマすべて雄が 50 本，同雌が 60 本とある。因みに，仔グマの飼い主だけが使用するチトッパアイという特別な彫刻を施したものを，雌は６本，雄は５本つくるとある。同ｃには，虹別のスワンコタンでは，クマの年齢に関係なく，雄が 50 本，雌は 63 本であるとし，その理由として，「女は男より交際が広いので、神の国にイモカ（お土産）として持ち帰るにも多くを要するのだ」とある。名取には，虹別スワンでは，名称はエペレアイとあり，土産の数量は，１歳雄が 50 本，同雌が 60 本であるが，常に数本多く持たせるとある。また，塘路・島太郎は，名称はチロシ，土産の数量は，１歳，２歳ともに雄が 50 本，雌が 80 本とあり，その理由としてやはり「熊の場合でも人間と同様に、訪問のとき女は男よりも多く、土産物を持参するから」とある。白糠・時田伊平は，名称の記述はないが，土産の数量は，１歳の雄は 50 本，同雌は 60 本，２歳にはその倍数を用いるとある。

4－3.平取・二風谷

平取・二風谷ａには，名称はヘペレアイ，土産の数量は，雌雄に関係なく２歳グマが 60 本，同３歳が 120 本とある。同ｂには，名称がヘペライとあるが，土産の数量の記述はない。名取には，平取・平村パウシヌレは，名称はペウレップアイとある。また，二風谷・貝沢ウエサナシは，名称の記述はないが，土産の数量が，１歳雄が 60 本，同雌が 30 本，２歳雄が 120 本とある。同じく二風谷の二谷国松は，名称はペウレップアイまたはヘペレアイとあるが，土産の数量の記述はない。ペナコリ

（荷負）・川上サヌクノは，名称はペウレップアイとあるが，土産の数量の記述はない。

4-4.旭　川

旭川aには，石山長次郎・キツエ，杉村京子をインフォーマントとして，名称はエペレアィ，土産の数量は，1歳雄が40本，同雌が30本，2歳雌雄ともにその倍の数とある。同bには，名称はエペレアイ，土産の数量は，1歳には30本，2歳には60本用意するとあるが，雌雄の別は記載がない。名取には，石山家の熊送りのとき，祭主アッチャシクル談として，土産の数量は，1歳雄が50本，同雌が30本，2歳雌雄ともにその倍の数とある。同じく川村家熊送り所見・祭主カネトアイヌ談として，土産の数量は，1歳雄が60本，同雌が50本，2歳雌雄ともにその倍の数とある。また，樺系統の砂沢市太郎談として，砂沢家（雨竜出身）は，名称はエペレアイ，土産の数量は，1歳雄が40本，同雌が35本，2歳雌雄ともにその倍の数とある。

4-5.白　老

博物館では，名称はヘペレアイとあり，土産の数量は，雄が50本，雌は60本とある。名取には，森竹エカシ談として，名称はヘペレアイとあるが，土産の数量の記述はない。総じて，白老のヘペレアイに関する資料は乏しい。

以上，花矢について見てきたが，名称，土産の数量をまとめると次のとおりとなる（表2）。名称は，十勝がチロシ，エペレアイ，ペウレップアイ，釧路がチロシ，エペレアイ，平取・二風谷がヘペレアイ44，ヘペライ，ペウレップアイ，旭川がエペレアイ，白老がヘペレアイであり，旭川・白老を除く3地域は名称が複数ある。ここから地域性を求めるとすれば，チロシの使用であろう。また，へ

表2　花矢の名称・土産の数量

地域		名称	土産の数量					備考
			1歳♂	1歳♀	2歳♂	2歳♀	3歳♂・♀	
十勝	伏古・古川	チロシ	50	60				
	音更・中村	1歳：エペレアイ	50	60	50	60	50・60	
		2歳：ペウレップアイ						
	ケネ		60	50	60	50		
釧路	虹別・弟子	チロシ	50	60				常に2～3本余計に持たせる
	釧路川周辺	エペレアイ	50	60	50	60	50・60	
	虹別		50	63	50	63	50・63	更科による
	虹別（名取）	エペレアイ	50	60				常に多く持たせる
	塘路・島	チロシ	50	80	50	80		
	白糠・時田		50	60	100	120		
平取・二風谷	二風谷	ヘペレアイ			60	60	120・120	
	二風谷・萱野	ヘペライ						
	二風谷・貝沢		60	30	120			
	二風谷・二谷	ペウレップアイ						
		ヘペレアイ						
	平取・平村	ペウレップアイ						
	ペナコリ	ペウレップアイ						
旭川	近文・石山他	エペレアイ	40	30	80	60		
	近文・石山		50	30	100	60		名取による
	近文・川村		60	50	120	100		名取による
	近文・砂沢	エペレアイ	40	35	80	70		名取による
白老	博物館	ヘペレアイ	50	60				

ペレアイとエペレアイは，エペレはヘペレの語頭のｈ音が落ちた結果であることから，エペレアイは北海道東部を中心とした語頭のｈ音が落ちる地域での名称，ヘペレアイはｈ音が発音される地域での名称となる。他の名称は広域に及んでおり，地域性は見られない。

土産の数量は，十勝では，２例が雄少雌多，１例が雄多雌少，釧路では，６例すべて雄少雌多，平取・二風谷は，雌雄同数，雄多雌少がそれぞれ１例，旭川は，４例すべて雄多雌少，白老は１例だけであるが，雄少雌多である。具体に本数を見ると，十勝の雄少雌多２例がそれぞれ50・60，雄多雌少１例が60・50，釧路の雄少雌多６例中，４例が50・60，１例が50・63，１例が50・80，平取・二風谷の雌雄同数１例が60（２歳）及び120（３歳），雄多雌少１例が60・30，旭川の雄多雌少４例は，それぞれ40・30，50・30，60・50，40・35，白老の雄少雌多１例が50・60である[7]。

これらを見ると，雌雄による数量の多寡及びその本数は，地域内においては，旭川を除いてほぼ同様であり，個人性も見られない。旭川は個人性が顕著であるが，２歳グマは１歳の倍数という点は同一である。

５．総括的に

霊送り儀礼を構成する要素として，儀礼実施の時期・日数，ヌササンに祀る神々，花矢の地域的な様相を江戸期の様相を史資料から見たが，明治以降について総じていえることは，儀礼実施の時期は，江戸期を踏襲しているものの，日数は増加している。ヌササンに祀る神々については，広域，地域内，個人と三域にさまざまな神が祀られており，特に個人が祀るものには，生業との関わり，あるいは居住する環境と深い関わりが見られる。ヘペレアイについては，広域的な同一性が見られるが，点として地域性が見られる。

これらのキーワードを背景とした儀礼の次第については，次稿で考察を試みることとする。

註

1）財団法人アイヌ民族博物館は，1989（平成元）年１月24日～27日，霊送り儀礼を実施しているが，同儀礼の記録は，祭主を務めた日川善次郎翁の伝承と口述がもととなっており，同氏が日高出身で，生活体験地が道東であることから，本考察の対象とはしなかった。

2）平取ｂ，旭川ｂ，白老はいずれも儀礼の伝承・保存を目的として実施されたものであるが，やはり実施期日を冬期間にしている。

3）この神々は祭祀者の記録がないが，祀られている神々のほとんどが平村コタンピラと同様であることから，同者からの聞き取りである可能性がある。

4）嵐山は古くからイワァテの場として用いられている（青柳1977，斉藤1970，松井1968）。

5）因みに，同博物館が1989年に実施した霊送り儀礼では，祭主・日川善次郎翁の意見によりポロヌサのマサァコロカムイとコタンコロカムイの間に，アトゥイコロカムイ（海を司る神）が祀られている。（同館1990）。

6）江戸期場所請負制下の各場所では，弁天社が盛んに建立されている。

7）因みに，何故に雌雄の本数の多くが60・50であるのか，また偶数であるのか，さらにはその差が10であるのか，興味のあるところである。

引用・参考文献

・青柳信克：1977「旭川市近文山で見つかった『送り場』について」『市立旭川郷土博物館研究報告』11　市立旭川郷土博物館

・秋野茂樹：2006a「江戸期におけるアイヌの霊送り儀礼―和人が記した記録からその様相を見る―」『環太平洋・アイヌ文化研究』５　苫小牧駒澤大学アイヌ文化及び環太平洋先住民族文

化研究所
——：2006b「アイヌの霊送り儀礼と場所請負制」『列島の南と北』近世地域史フォーラムⅠ　吉川弘文館
——：2008「場所請負制とアイヌの熊の霊送り儀礼―軽物・イコロから見る―」『帯広百年記念館紀要』26　帯広百年記念館
・伊福部宗夫：1969『沙流アイヌの熊祭』みやま書房
・犬飼哲夫・名取武光：1939「イオマンテ（アイヌの熊祭）の文化的意義とその形式（一）」『北方文化研究報告』2　北海道帝國大學
・内田祐一：1989「伏古におけるチセと附属施設について」『アイヌ民族博物館研究報告』2　財団法人アイヌ民族博物館
・大友喜作編：1972『北門叢書』5　国書刊行会
・小川正人：1997「イオマンテの近代史」『アイヌ文化の現在』札幌学院大学生活協同組合
・倉光秀明：1953『上川アイヌ熊祭り』アイヌ祭祀研究会
・財団法人アイヌ民族博物館編：1995『イヨマンテ―熊の霊送り―報告書Ⅱ－平成2年2月におこなったイヨマンテの実施報告－』財団法人アイヌ民族博物館
・斉藤建二：1970「近文アイヌの送り場」『旭川郷土博物館研究報告』6　市立旭川郷土博物館
・佐々木利和・谷澤尚一研究解説：1982『蝦夷島奇観』雄峰社
・更科源蔵：1955『熊祭』北方文化写真シリーズⅠ　楡書房
・手塚薫他：2005「接触・交錯するアイヌと和人のまつり―『北役紀行』記載，文久3（1863）年ハママシケの神社祭礼とクマ送りから―」『北海道開拓記念館研究紀要』33　北海道開拓記念館
・名取武光：1941「沙流アイヌの熊送りに於ける神々の由来とヌサ」『北方文化研究報告』4　北海道帝國大學
——：1985『アイヌの花矢と有翼酒箸』六興出版
・東村岳史：2002「戦後におけるアイヌの「熊祭り」―1040年代後半―1960年代後半の新聞記事分析を中心に―」『解放社会学研究』16　日本解放社会学会
・北海道教育庁社会教育部文化課編：1982「2．ヒグマをめぐる人間活動」『昭和56年度アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査Ⅰ　旭川地方）』北海道教育委員会
——：1983「2．ヒグマをめぐる人間活動」『昭和57年度アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査Ⅱ）』北海道教育委員会
・松井恒幸：1968「嵐山オプニカについて」『嵐山遺跡』嵐山遺跡群調査会
・吉田　巌：1953「古稀談叢―十勝アイヌ11故老の談話記録―」『民族学研究』17-3・4　日本民族学協会